

## 糞線虫症の病態に関する研究

糞線虫は皮膚を通してヒトに感染し、主に十二指腸や上部空腸の粘膜に寄生する線虫の一種です。本虫はアフリカ、アジア、および南アメリカの熱帯・亜熱帯に広く分布し、世界的には約 5000 万～1 億人の保虫者がいると推定され、我が国では沖縄・奄美地方が浸淫地となっています。1991～2004 年の琉球大学第一内科入院患者の調査では、入院患者の糞線虫感染率は 6.3%で、その 95%は 50 歳以上でした。この結果より沖縄県には今なお約 3 万人の糞線虫感染者が存在すると考えられます。また糞線虫とヒト T 細胞性白血病ウイルス(以下 HTLV-1)との重複感染の場合、糞線虫症が重症化しやすいことが知られています。

癌のある患者においては抗癌剤の使用による免疫抑制や栄養不良のため、糞線虫症が重症化するリスクが高いと考えられます。1991～2005 年の琉球大学第一内科入院患者の調査では、50 歳以上の胆道癌(胆のう癌・胆管癌)患者の糞線虫感染率は癌のない患者と比較して有意に高く、同様に 1991～2004 年の琉球大学第一内科入院患者の調査では、50 歳以上の胃癌患者の HTLV-1 感染率は癌のない患者と比較して有意に低いという結果が出ています。

このような背景のもと、1991 年 1 月から 2014 年 12 月の 24 年間で琉球大学医学部附属病院第一内科入院患者のデータを再検討します。糞線虫感染率、HTLV-1 感染率、また各癌疾患との糞線虫感染症、HTLV-1 感染症の関係を検討することにより、抗癌剤治療による糞線虫過剰症候群の発生を抑制することができ、将来的には糞線虫制圧による衛生環境の改善、癌患者の減少が期待されます。またわが国では糞線虫症は沖縄県に特有の疾患の様相を呈するものですが、全世界的にみると熱帯・亜熱帯に住む多くの人々の福祉に貢献することにもつながると考えられます。

当大学院では、便検査・血液検査から得られたデータを解析し、糞線虫症の重症化や治療に関する研究を行っております。個人情報は一切伏せられた形で行われます。

研究対象者: 1991 年 1 月から 2014 年 12 月の 24 年間で琉球大学医学部附属病院第一内科に入院した患者の中で、普通寒天平板培地法による糞線虫便検査および血清抗 HTLV-1 抗体を測定した 5050 症例を対象とします。

研究方法: 1991 年 1 月から 2014 年 12 月の 24 年間で琉球大学医学部附属病院第一内科に入院した患者の中で糞線虫および血清抗 HTLV-1 抗体を測定した 5209 症例をレトロスペクティブ(後ろ向き)に検討します。対象患者の性別、年齢に関して調査します。以前の検討では診断時年齢 50 歳以上で検討を行っていたが、24 年間の長期間にわたる検討であるため、今回は生年による検討も行う。対象患者における性別間の糞線虫感染率、HTLV-1 感染率の比較に  $\chi^2$  検定を用います。また 5209 症例のうち 1950 年代以前生まれの患者 4056 例に関して、抗 HTLV-1 抗体陽性の有無を踏まえたうえでの糞線虫感染率、糞線虫陽性の有無を踏まえたうえでの HTLV-1 感染率の比較にも  $\chi^2$  検定を用います。

また 1950 年代以前生まれの患者 4056 例 に関して、担癌患者(食道癌，胃癌，胆管・胆囊癌，肝癌，大腸癌，肺癌，膵臓癌)の糞線虫感染率，HTLV-1 感染率を，コントロール群を癌のない患者と設定しそれぞれの担癌患者群と比較検討します．この際両群の平均年齢に統計学的有意差を認めた場合，ロジスティック回帰分析を用いて性年齢を補正した上で検討します．

研究期間：1991 年 1 月から 2014 年 12 月の 24 年間で琉球大学医学部附属病院第一内科に入院した患者の中で糞線虫および血清抗 HTLV-1 抗体を測定した 5209 症例をレトロスペクティブ(後ろ向き)に検討します．

本研究について、ご質問やご不明な点などがあれば下記までご連絡下さい。

本研究への参加拒否・撤回の申し入れは自由に行えますので、希望される方は下記連絡先までお気軽に連絡してください。

連絡先：098-895-1144      メールアドレス：k138754@eve.u-ryukyu.ac.jp

代表者名：田中照久，平田哲生，感染症・呼吸器・消化器内科学講座 教授 藤田次郎